

是れ著者自身が特に價値の問題に興味を有せるに基つけるものであらう。又各哲學者に對する批評につきても精粗自ら一ならず、例へばヴントに對しては節々に批評を加へ、始めより評論を目的として筆を探りしにあらざやと思はれる程なるにギュエー・ニーチェ等に對しては簡單に回頗的に評し去るに止めてゐる。兎に角學說の叙述と、其の批評とが交互に錯綜し、其の間に自ら著者自身の立場を發露せしむる所は本書の長所であると共に又讀者の判斷力に課せられた重い負擔である。

尙譯文について一言を加へたい。凡そ逐字的に譯すれば生硬な齷齪口調となり、自由に譯すれば原著の嚴密性が失はれる、其の何れを取るべきかは一概に論ずべきではないが、余自身としては、文學書の如く、主として情感に訴ふるものの外はなるべく平易な邦語に碎き、凸凹の多い逐字譯よりも、自由な譯し方を選び、邦文でありながら其の意を解するに苦しむやうなことはないこととしたい。本書は併し逐字譯である。逐字譯なるが故に従つて難解に今一息の工夫をと思はるゝ節が極めて多い。全巻を通じてヘルグソンの部分が比較的最も手際よく、同じ逐字譯を取るとしても、あの調子で首尾一貫せられたら、讀者の無益の勞力を如何ばかり軽減するであらうと、遺憾に堪えない。譯語の不適當なるもの亦少くない。例へばプートルーの部に於て *equivalence* を「等位」(同一三二頁)と譯し同じ頁に於て同じ語を再び「對當」と譯してゐるが、これ寧ろ等價又は等量とすべきで、プートルーの哲學を解する上に於て最も大切な此の語の如きはわけもなく「等位」。「對位」等と種々に譯さるべきでなからう。ドウ、フリースの「變化の

說」(同一三四頁)は固より「突然變異の說」と改むべきで、生物學上 *Theory of Mutation* と言へば現今特に「突然變異說」を指すのである。一六〇頁の視覺論者 (*Visualist*)、動力論者 (*Motivist*) あるいは「視覺典型の人」「運動典型の人」の誤りである。其の他「唯外見上……」(*Only apparently……*)と譯すべきを、唯「明らかに……」とし(同一二八頁)之が爲に前後の文脈を亂した如き不用意の誤謬も時々發見せられる。併し余は茲に譯者の缺點を指摘するを目的とするものでないから、以上の一二の例によつて譯者の注意を喚起するに止めて置かう。余と雖も齷齪譯の事業の如何に困難なるかを知つてゐる、従つて此の好著を我が讀書界に紹介せられた譯者の勞力に對して深大の感謝を捧ぐるに吝なるものでない。斯かる不愉快な例を假りたのは、再版に際し、今一應全部を閲讀するの勞を取られ、不適當なる譯語を改められんことを譯者に望むの念に過ぎない。同時に言在 (*Reality*) (八〇頁) 盡し得ない (*cannot have*) (八七頁) 意中 (*In the air*) (九四頁) 經驗の對象 (*The collection of experiences*) (一六三頁) 悲觀的 (*Pessimism*) (二〇八頁) といふが如き全文の意味を誤らしむるの恐れある誤植を嚴密に訂正せられたら、哲學的氣運の勃興しつゝある今日本書は必ず忠實なる多數讀者の歡迎を受くるにあらう。(定價一圓五十錢、東京橋區目黒書店發行)(篠原助市)

ニーチェ書簡集

和辻 哲郎譯

近來俄に勢を加へて來たトルストイ熱勢の流行と相並んで、之と殆んど對角線的の對立をなすニーチェの思想の、我思想界の一部

に於て相當に賞讃せられ、之に關する譯者の相陸で公にせらるゝのは、歡迎すべき事實と云ひなければならぬ。蓋しニーチェは從來屢々誤解せられたやうに單なる Demoniak を説いた一人の歌人ではない。其の所謂「超人」の教説の、人間の本性に對する眞聖なる尊敬と、「文化」の理想に對する強い憧憬に燃え居る清教徒的獅子吼なるの事實は暫く云はず、之を彼の人格に見るも、彼は「人間愛」に關する分け前を豊かに湛えた一個懐かしいハートの人であつた。事實彼は其の教説に於て彼の所謂卑弱なる人間愛を極端に排斥したにも拘らず、其の心情の底深く植え付けられた愛の本能をどうすることも出来なかつた。この事は之を彼の學説と關聯して如何に考へらるべきであるか。或は之を以て思想家にあり勝ちな學説對人格の背反として無雜作に片付けてしまふべきであるか、將また彼がこの己み難い人間の愛の要求を人一倍に感じつゝも能く之を征服して一步高い別境地に超出したる點に於て彼の偉大を認むべきか、之等の考察は暫く措く。兎に角彼がその人格に於て決して一の野獸にあらず、吾等と一様に生々しいハートを持つた人であつた一事は、吾等をして一層彼の教説に親ましむるに十分である。——而して此の點に關して最も吾人を啓明するところあるものは彼のその母と妹とに與へた書簡に過ぐるものはない。

ニーチェ書簡集の譯者和辻哲郎氏はさきに「ニーチェ研究」の大著を公にしてニーチェ研究者として相當の名聲をなしたるの人、今また *Richard Nietzsche's Briefe an Mutter und Schwester* の中から殊に興味ある書簡二百七十五通(全書簡五百五通)を抜萃

繙譯し、之に諸所「彼の生活開展を際立たせると信ずる程度」で簡單な説明を加へてこの一書をなす。吾人は譯者がニーチェ紹介者としての勞を多すると共に、哲學者としてのニーチェの外更に「人間」としてのニーチェを知らんとする人々に對して是非此の書の一讀を勧誘する所である。但し收むるところの書簡はもとよりすべて其時々必要に應じて書かれた私信であるから、我々から見て餘り興味を引かない、又時として了解することの困難な日常の瑣事によつて充されて居るところも少くないが、然しその間を通じて赤裸々なニーチェの偽らざる姿が躍加として紙上に現はれて居り、或る意味に於てその傳紀的抑揚を缺如せる點が却つて彼の内的生活の轉向に觸るゝに多大の便宜を提供する所あるは争はれない。殊に一讀ゆ私に深い印象を残したものは彼が終生變らなかつた妹エリザベス、ニーチェに對する愛、並びに彼が殆んど後半生の全體を擧げて戦はなければならなかつた病弱苦惱の歴史である。茲に私に實にわが偉人ニーチェの血と涙とを見た。而して彼が這個病弱多感の身を以つてしてよく此等の慘ましい試練に堪へ、最後にかの雄々しいけ高い「超人」の凱歌を擧げ得たるの一事を思ふてはニーチェの學説に對して一層の讚美と崇敬とを拂はざるを得ないものである。

此の書が譯者に於てその人を得たるの一事は今更云ふまでもない。たゞ強て私の注文を云へばあのかたりに直譯的な口調を今少しく何とかして貰ひたかつた。——この事は譯者も意識したその「獨逸の文脈を出來るだけ生かさう」とした顧慮から來たと辭つて居るところではあるけれども。(東京市神田區南神保町十六番

地岩波書店發行。四六版五四二頁。定價一圓五十錢(高級智海)

寄贈書籍雜誌

現代に於ける理想主義の哲學

文學博士 西田幾多郎著 弘道館

論辯學與義 文學士 今福 忍著 寶文館

ニイテエ書簡集 文學士 和辻 哲郎譯 岩波書店

美學原論 文學士 大西 克禮著 不老閣書房

哲學雜誌、思潮、丁西倫理會講演集、心理研究、六合雜誌、密宗學報、東洋哲學、東亞之光、早稻田文學、學校教育、教育、内外教育評論、普通教育、小學研究、教育研究、教育學術界、教育界、教育時論、東京教育、京都教育時報、兵庫教育、奈良縣教育、靜岡縣教育、佐賀縣教育會雜誌、岐阜縣教育、三重教育、愛知教育雜誌、長崎縣教育會雜誌、都市教育、信濃教育、佐賀縣教育、藝備教育、宮城教育、愛媛教育、

前號目次

ダヤーナンドの思想	文學士 羽 了 諦
感情に關する諸問題	文學士 千 葉 胤 成
社會の全體と部分	文學士 高 山 保 馬
公理體系の二種	理學士 園 正 造
美學の基礎に就ての考察(承前)	文學博士 深 田 康 算
彙報	